大正時代大倉陶園蒲田工場の生活

黒澤　学

はじめに

大倉陶園は、一九一九年（大正八年）五月十五日に、東京市蒲田区西六郷一丁目四番地（現在の東京都大田区西六郷一丁目四番地）で地鎮祭をおこない、この日を創立記念日とした。そして、一九六〇年（昭和三十五年）四月一日に、神奈川県横浜市戸塚区秋葉町二〇番地へ移転し、現在に至っている。

本稿は、大正時代を中心に、大倉陶園蒲田工場の生活について述べる。次の史料は、大倉陶園初代支配人日野厚著・発行『大倉陶園二十五年譜紀』（一九四四年十一月）の抜粋である（『大倉陶園二十五年譜紀』には頁数の記載がないため、頁数は記さない）。

抑も当園は、上下一体其の職に忠に、憂楽を共にするは当園の一貫せる精神にして、当時にありては稀有の従業員の住宅、独身者の合宿所の如きも、工場の建設と共に工事を併進す。

右のとおり、当時の大倉陶園の一貫した精神は、上司も部下も一体であり、自らの職に忠実に、憂楽を共有することであった。そして、その団結を保つために、当時希有の従業員住宅（社宅）や、独身者の合宿所（独身寮）も、敷地内に建設され、職住接近の環境が用意されたのである。本稿で述べる生活とは、この従業員住宅や合宿所での生活である。

それでは、実際の蒲田工場の生活はどのようであったのであろうか。その実態が詳しく書かれている史料がある。日野の右腕として初代工場長となり、のちに初代研究部長を務める岩田恒三郎が著した『陶苑懐古』（私家版　一九四四年頃カ、「苑」は原文ママ）である。本稿は、主にこの史料を素材にする。なお、『陶苑懐古』は筆者の読み下し原稿を使用するため、引用頁数の記載をおこなわないことをご承知願いたい。同書は送り仮名や濁点などが現代とは異なっているが、原文のままとした。また、以下本稿で出典を明記しない史料は『陶苑懐古』からの引用である。

1　蒲田工場の環境

本節では蒲田工場の環境について述べる。なぜ蒲田が工場建設地として選ばれたのであろうか。次の史料は、一九四六年（昭和二十一年）十月、創立者大倉和親が、大倉陶園創立前後をふりかえって語った思い出話の抜粋である。出典は、大倉和親翁伝編集委員会編・発行『大倉和親翁』（一九五九年七月）一四四頁である。

大正六年（一九一七）頃、森村さんと相談して敷地をさがしたが、米国時代からの友人タイプライターの黒沢貞次郎氏が、自分の土地を譲ろうといわれ、これを中心として周囲を買収することにしたが、この目的がわかるといけないので、鉄砲打ちの姿に変装して検分し、いまの蒲田の土地に決めた。

この史料によれば、蒲田工場の土地は、和親のモリムラブラザーズ（ニューヨーク）時代以来の友人で、当時国産タイプライターの製造で有名であった黒澤商店店主黒澤貞次郎の譲渡によるものであった。和親のこの思い出話にもあるとおり、当時の蒲田は猟師姿で歩くのが不自然ではないくらい自然が残っていたことがわかる。『陶苑懐古』は次のように述べている。

此の附近は、新浮鉄工所の工事場と吾が工事場及び黒澤工場丈けで、遮るものなく、吾が敷地から京浜国道を通る人がよく見えた。農家ハ少々あつたが点在する丈け。（中略）西にハ多摩川の土堤が目の先に、其土堤の彼方に砂利船の白帆が見える。底の平らな大きな箱船ハ、砂利船の特有の形。一寸愛想も風情も無い様にも見えるが、之が川を上る時ハ曳舟で行く。船頭は土堤に沿ふて上り下りして船を曳いて行く。上流に行つて砂利を掬ひ上げ、船が一杯ニなると帆を上げて暢んびりと下る。（中略）一寸箱庭風景を思ひ出すが、此の多摩川原の風景ハもつと大きい。富士は殊ニ美しく、裾野迄見える。桃梨の畑は續き、菜種の花が散見する春ハ、随分美しかつた。新緑の頃から夏ニ掛けても又、緑の色ハ塵なく新鮮で、市中の公園等の緑とハ大分違つて居た。

このように、かなりのどかな田園風景であったことがわかる。そのため、工場用地として十分な広さが確保できたのであろう。

また、蒲田の地が選ばれたのは、東京の中心地から近かったという理由もあった。なぜならば、大倉陶園の顧客として想定されていたのは、大倉陶園のつくる最高級の美術陶磁器の価値を理解し、購入できる経済力のある人々であった。それらの人々は、当時東京の中心地に多く住んでいたからである。

通常、陶磁器製造の工房や工場といえば、原料となる良質な陶土が採掘される場所の近く、すなわち原料生産地近郊に構えるものであるが、大倉陶園はその逆で、顧客の近くに工場を構えるという経営戦略をとった。それによって、顧客が気軽に工場を訪問できたのである。そして、顧客だけでなく、当時東京近郊に住んでいた芸術家達も工場を訪れ、従業員に指導をおこなっていた。創業まもない大倉陶園にとって、当時の有名芸術家の技術指導が与えた影響は大きなものがあった。

さらに、蒲田が選ばれたもうひとつの可能性として、黒澤貞次郎の黒澤商店蒲田工場の影響があったと思われる。黒澤商店蒲田工場は、当時唯一無二の職住接近の工場で、敷地内に社宅があり、幼稚園・小学校までが併設されてい

た。このような工場の敷地計画は、当時の工場労働者の劣悪な生活環境を文化的に改善するための福利厚生であった。当然和親は、「黒澤村」とまで呼ばれた黒澤商店蒲田工場のことを黒澤から聞いていたであろうし、そこでの実践を参考にした可能性が高い。

2　蒲田工場の社宅

本節では、大倉陶園蒲田工場内に建設された、主に世帯もち従業員向け住宅である社宅について述べる。次の史料は、岩田恒三郎が、第一号住宅として建設された日野厚の社宅を訪れたときの印象を述べた部分である。

初めて通されたのハ、明るい心地のよい書齊兼應接間。之は又同時にスタヂオでもあつた。椽側の廊下、窓の白キヤラコのカーテンの其裾に、簡單な型染めにした花模様を連ねたその清楚な感じは、此處に来た余が第一印象として、何時迄も頭に残つて居る。

この第一号住宅は、日野自身が設計したものである。書斎兼応接間は、図案家としての日野の仕事場であるスタジオも兼ねていた。家でも仕事をすることができたのである。この住宅は、岩田に明るい印象を与え、後々まで頭の中に残ったほどのインパクトを与えたことがわかる。

次に、同じく日野が設計した第二号住宅について述べる。こちらは岩田が最初に入居したこともあり、『陶苑懐古』の描写もより詳しい。

日野氏御自慢の硝子の家。其の頃文化住宅の萌した時なので、氏は工藝圖案家として時流に先ち、其の温奥を如實に表現された處女作の第二であつた。贅澤な建築ならば問題もないが、一つは経済的に、材料も甚だ粗末なものを使ひ、然も文化的に又美的要素を失はぬ、粗末ながらもそこに味のある文化住宅を猊つての此の建築である。殊にその頃は欧州大戦后の凡ての物の高い時で、材木とてもまともな挽角は使へないで、夛く押角の皮付、丸味のある廉いものを使つたのだ。此の建物は、平家建の柱を使つて屋根を急勾配にして、その屋根裏を使つて二階とし、短い柱で二階を造るなどの工夫をし、従来の住宅の定例たる廊下といふものを出来るだけ少くして、狭い建坪を有効に使ひ、然も室と室との往き來を便に、そして、窓を夛くして、採光と通風に心懸け、經費を出来るだけ少くして住みよい家にと、苦しい工夫が凝らされた。成る程明るくて氣持がよい。雨戸はなく、朝晩之を開閉する世話もない。實際雨戸といふものは、其開閉の面倒といふよりそのうるさゝ、且つは憂欝な感じのものである。殊に朝、折角の黎明の心地よさは味へない。自分も昔から此の感じで、雨戸は嫌ひであつた。

右のように、第二号住宅は、当時流行し始めた文化住宅のような設計であった。第一次世界大戦終戦直後で、物価が高騰しており、材料は安く抑えなければならなかった

が、日野は工夫して、「住みよい家」を設計したのであった。雨戸がないのもその特徴で、岩田はそこも気に入っていた。

このように、工場敷地内としてはかなり凝ったつくりの社宅が次々と建てられていったのである。

続けて岩田は第二号住宅の住み心地を述べている。

先づ何よりも此の家に入つて快く感じたのハ、自然を友とし自然に親しめる事で、之が何よりも嬉しかつた。寝ても起きても、日も月も、草も木も、鳥も蟲も、皆自然が自分の周圍を離れずに居る。之で天井が硝子で、仰向けに星が見えたらば、それこそ理想的であるがと思はれた。然し、それ迄に至らずとも、今迄街にばかり住んで居た自分としては、斯る田園の自然に取り巻かれて起居し得るのを殊に愉快に感じた。之が此の家の第一印象であつた。尤も、一室丈け完成して、造作も只疊・建具が入つたといふ丈けで、カーテン一つなく、此處に身體一つを入れただけなのだから、まるで田甫の中に寝てるのと同じて、一層其の感を強くした。蛙は耳許でやかましく泣く、蛍ハ窓から飛ひ込んで来る。毎夜一人で此處に寝た。（中略）電燈もまだ點火の運びに至らず、ランプもないので、夜ハ月を友として、疲れた身体を横へるのみであつた。

岩田は『陶苑懐古』の中で、これらの環境を称して、「附近で異彩を放つた文化村」と述べている。また、蒲田の生活について、「今迄街にばかり住んで居た自分としては、斯る田園の自然に取り巻かれて起居し得るのを殊に愉快に感じた」と述べている。実際、工場の外は田甫ばかりで、娯楽施設もなく、家にいても仕事のことを考えているような生活では、社宅のデザインや住み心地が良いということは、重要な要素であったと想像される。

3　蒲田工場の独身寮

本節では蒲田工場の独身寮について述べる。寮は当初「合宿所」「寄宿舎」と呼ばれ、各地から集まってきた従業員が一時的に生活する宿舎であったが、やがて独身寮となる。

當園でも最初ハ合宿所の称呼を以てし、殊に他の工場と異なつて、従業員を何れも紳士として扱ふといふ主義に對して、特に當方の宿舎は寄宿舎でハありません。従業員共同の自治的宿舎で、凡てハ舎員が經理して行くものだと殊更に説明するの要もあつた。然し、後に工場法が出来てから、工場員の宿舎としてハ、合宿所とても皆寄宿舎の取締規則を受け、又、寄宿舎と称しなければ通らなくなり、厭でも此の言葉を使はざるを余儀なくされ、遂に寄宿舎といふ様になつた。そして、寄宿舎扱は余儀なしとして、何とか名称を別ニ附したい。寮といふ言葉が適切。そこで、只寮でハ濟まないから、何々寮と意気な名称が欲しい。折角名称を付けるのだから慎重ニ考へる。舎員連中種々相談、

和光寮と言ひ出した。

右のとおり、独身寮を「合宿所」と呼ぶか「寄宿舎」と呼ぶかということについては、細かいこだわりがあったのである。しかし、一九一六年（大正五年）に施行された工場法によって、それらは全て「寄宿舎」と公称することを余儀なくされる。そこで、大倉陶園では、この公称寄宿舎を「和光寮」と呼ぶことにして、独自に「當方の宿舎は寄宿舎でハありません。従業員共同の自治的宿舎で、凡てハ舎員が經理して行くもの」という趣旨を貫徹することにしたのである。そして、後にはこのような独身寮が増えることになるのであるが、「超然寮」などと、それぞれ住人によって好きな名称がつけられた。

それでは、この寮（寄宿舎）での食生活について述べる。

寄宿舎といへバ、先づ何よりも最大関心事は賄といふ事である。何處の寄宿舎でも第一に問題になるのハ此の賄で、夛くの寄宿舎ハ此の賄を請負でやらせる。そこに、高いの廉いの、ぼるのゴマカスのとうるさい問題が絶えない。當園の自治的合宿所でハ、所員が賄を指図して、其の食費の實費を負擔し、賄の者の食料は所員全部で負擔するので、高い・安い、うまい・まづいハ、所員全部の合同意志に基いて自ら決める事となるので、他の寄宿舎の如き賄の問題はない。

右のように、食生活は寮生活の最大関心事であった。岩田は、大倉陶園は「自治的合宿所」であったので、「他（社）の寄宿舎の如き賄の問題はない」と断言している。しかし、別の部分では次のような問題があったことを述べている。初代の賄人横山半次郎について述べた記述である。

半次郎といふのハ元板場に稼いて居たもので、庖丁には相當腕に確信があつたので、自然一寸煮るものにさへその腕前が見せたかつた。従つて、材料の買出しも、魚・肉・野菜一切、自分に仕入れなければ気に入らない。賄兼小使で、事務所の用事と共に毎日の過半は此の買出しに掛つた。トタン板で造つた四角のガン〳〵を肩に掛けて、大倉の印の入つた絆纏で、毎日大森・羽田の市場に買出しに行つた。そして、余所の人からハ常に大倉サン〳〵と呼ばれ、得意にもなつて居た。今日は何の刺身、塩焼、カツレツと、日々の献立にハ大に頭を使つた。勿論此の寮、合宿所員の程度が、若い収入の少い人を標準にしなければならぬので、経済上より相當制限しなければならなかつたが、賄が斯様の者であるからどうしても材料を撰ぶし、調味料とても充分に使へば賄經費ハ嵩むのが常であつて、若い人達にハ經済上の負擔ハ大きかつた。が、世帯持も臨時に入つて来、之等の連中ハ若い人に比べてハ懐も裕福なので、もつと費用掛けてもうまいものが欲しいと贅澤を言ふた。中にハ夕の食卓には一本を据えなければならなかつた。時にハ、こんなもので飲めるかなどの不足もあつたが、まづくとも腹一杯食へばよい若い人達にハ、それはつらく耳に當たつた。

このように、初代の賄人は腕の良い元板前を雇ったた

め、食費がかなりかかったのである。そして、寮には「若い収入の少い人」もいれば「懐も裕福な」「世帯持」もいたため、その経済格差や食の好みの相違が問題になったのであった。

4　宴会

本節以降、蒲田工場の生活のうち、娯楽・余暇についていくつか述べる。まずは宴会である。

何分田甫中の田舎、まだ荏原郡蒲田村の時代。無論料理屋等はなし。僅かに川崎の町が此辺唯一の遊び場所であった位で、此辺でハ何處にも一寸行く處ハなかつた。従つて、自然何かといふと直ぐ御手盛の御馳走で、場所ハ此の合宿所階下の二室を打通して會場とした。新年宴会、忘年会、歓迎会、送別会、月花の宴、雪之宴と言ひ出して、直ぐ調ふ次第である。デカンショも始まる。日野さんの紀伊の国、半さんの独々逸草箒、農園加藤耕次君の「その時一人のラツパ手は」の軍歌と詩吟の蠻聲ハ、又何時迄も忘られぬ。鈴木三五郎君の三河萬歳、又手に入ったものであつた。何時か日野さんハ茲から家迄が足許も危ふく、辛つと玄関に辿りついてそこに打倒れ、犬やと呼はれた事もあつた。桑原君は、天井が廻るとよく言ふた。偶にハ根太を抜いた事もある。

右のように、当時蒲田に料理屋はなかったようである。したがって、宴会をするとなると、自然自分達の「御手盛の御馳走」ということになり、このようなときは、初代賄人横山の料理が喜ばれた。場所は合宿所一階の二室をうちとおして会場としたのである。

余興も時代をあらわしている。皆でデカンショ節を歌ったりすることもあった。デカンショは、彼らが学生時代に流行した学生歌である。三重県師範学校出身の日野厚は端唄「紀伊の国」を歌った。また、「その時一人のラッパ手は」は、日清戦争の逸話を歌った「喇叭の響」の一節である。

このように、「何分田甫中の田舎、まだ荏原郡蒲田村の時代」に、宴会は貴重な娯楽であった。

5　花見

自然に囲まれた蒲田工場では、花見もまた良い娯楽であった。そのときにも横山の弁当が好評であった。

遠足・お花見の弁當、仕出しも全く玄人の御手の物。折まで仕入れて来て、鯛の塩焼、いかの照焼、うま煮、きんとんと、其の都度中々に凝つたもので、之に灘の生一本ハ忘れない。

大正十年四月、陶園ニ於て第一回のお花見が挙行された。六郷下り、大師詣でに羽田の潮干狩。出入の河岸の丸半材木店から傳馬船一艘借りて、安養寺河岸から乗り出した。半次郎得意の庖丁で折詰が用意され

た。蓄音器・レコードを積込んで、漕ぎ出すと同時にメートルを挙げた。時は桜散りそめ桃梨の盛り。昔から大師堤の桜は此辺の名所であつた。土堤には徒歩党、こちらは船で、水陸互ニ気勢を上げて相應じ、静かな鏡の様な川面を滑りて行く。同行日野・岩田・貴玉・小田・山口・加賀・鈴木三・毛利・多田努・横山初・横山半の十名なりしか、大師の河岸に船を付け、茲に下船、大師詣でをした。門前の土産物賣店・茶店の客呼ぶ聲も、今よりハ遙かに大師詣での気分が濃厚であつた。参詣を済して再び船に乗り、川を下りて羽田に着く。或る者は羽田稲荷に詣でた。醉つた者は船の中に眠つた。それから河口に乗り出し潮干狩。猛者連は水泳。日の暮れると共に船を返して、六郷橋畔に船を上つて帰つた。此時通勤ハ一・二名だつたから、醉余の好い気持で、一同一緒に寝所に帰つた。

一九二一年（大正十年）四月に、大倉陶園では第一回の花見が挙行された。花見がてら、六郷川（多摩川下流の別称）を下って川崎大師に参詣し、羽田で潮干狩りをした。出入りの丸半材木店から伝馬船を一艘借りて、安養寺河岸（安養寺は大田区西六郷に現存する）から出発した。蓄音機やレコードを積み込んで、出発と同時に酒を飲み出すところは、現在の社員旅行と同様な印象である。一方で、徒歩で向かう一団もいた。蒲田工場から川崎大師までは徒歩圏内である。休暇を使った充実した一日の様子がわかる。

6　川崎

先の記述にもあったが、当時、蒲田工場最寄りの繁華街は川崎であった。

此の頃蒲田にハ、肉屋は国道のところに一軒あつたばかり。床屋ハ女塚に汚い店が一軒あつた切りで、従つて、理髪となると川崎迄出掛けた。無論電車なんかにハ乗らない。一晩かゝつて理髪を済まし、盛り場を一周りして来ると丁度よい散歩ともなり、又、之が此處での唯一の慰安であつた。合宿の長老組は時々帰らぬ晩がある。向ふで鉢合せをして、やあ〳〵といふ様の事も間々あつたそうな。何分家族を田舎に置いて独りぽツチで、年の違つた若者相手では話も合はず、一盞傾けてから、物足らぬといふ譯で、小田・桑原などの伯父さん連は、時々川崎に足を運んだ。蒲田の駅から爰までハ、どうしても不便な線路傳ひに歩かねバならぬ。自然、川崎の町や大師位ハ徒歩で行く事を當然として居た。大師へもよく夜歩いて行つた。蒲田の驛の如きハ、乗降客ハ二・三人で、時々居眠りして乗り越し、騒しいので目が明くと川崎であり、慌てゝ飛出し、今度ハ川崎から歩いて来たものだ。

単身赴任の「長老組」は、寮で共同生活をする若者と話も合わず、理髪がてら川崎まで出かけて、ときには朝帰りすることもあった。川崎へ出かけることが「此處での唯一の慰安」であったのである。

一方で、『陶苑懐古』には、蒲田にも少しずつ店が増えていく様子が描かれている。次の資料は、一九二〇年（大正九年）八月～九月の記述である。

野菜・魚類・惣菜の買出しハ、凡て近所ニハなくて、蒲田の町迄行かねバならなかつた。よく夜店で野菜を仕入れなどした。丁度其の頃蒲田の町に初めて夜店が出るといふ事になつて、物珍らしく、直ぐ行つて見た。今の東口、それも驛前から国道寄りに、夜店といふても殆んどが近所の百姓の青物を持つて出る位で、小間物・雑貨等はおい〳〵といふ譯であつたが、此の夜店でも相當賑つた。之が蒲田の夜店の濫傷で、之が最近の様に発達したのだ。

右の引用にある「蒲田の夜店」は、地元はもちろん、当時近隣ではかなり有名であったようである。月村吉治編著『蒲田撮影所とその付近』（一九七二年三月）という松竹蒲田撮影所について著した書籍の三九頁に、「京浜間随一の名物、夏などは銀座マンも蒲田の夜店へ足を向けたとか」という解説がある。

7　テニス

社史として大倉陶園の娯楽を語るときに、テニスを欠かすことはできない。なぜならば、蒲田工場から戸塚工場へと移転してからも、しばらく続いた娯楽であるからである。蒲田工場も戸塚工場も、東海道線の線路のすぐ横に建てられているが、車内から工場の中でテニスをしている社員の様子を見て、乗客がうらやましがったという言い伝えを、筆者も先輩社員から聞いたことがある。

其の内に内務省の技手などとも懇意となり、又、それ等の人を動かさねバならなかつたので、河川改修事務所の連中とテニスの試合など何度もやつて、意志の疎通に力めた。

テニスは、向ふにも相當上手なものが二・三人居た。こちらは其の頃ハ従業員六・七人であつたから、テニスパーチーとしてハ全員挙つて選手でなけれバならなかつた。其の頃の陶園のテニスと言へば、先づ第一に御大の日野氏。昔鳴らした杵柄といふ腕前。だが其の他は、皆此處で始めてラケツトを持つた連中ばかり。鈴木三五郎・桑原惣七君の如き手合も錚々たるもので、拾圓・拾五圓といふ其の頃でハ相當立派なラケツトを持つて、ラケツトだけは凄い。此の元気で總員ラケツトを持たぬ者ハない。夏ならば、朝ハ五時から夕方は暗くなるまで、朝飯前に一勝負、食后始業前児ニ一勝負、休憩時間から終業後と、終日テニスで暮れる。冬でも中々猛訓練、霜の中でもお構ひなしに練習した。練習といふよりハ此處での唯一の娯楽である。田甫の眞中で、他に何の慰安も娯楽もなかつたからである。

テニスを通じた内務省の技手との交流は、蒲田工場の敷地の埋立の許諾申請を円滑に進めるためであった。テニス

が蒲田工場の娯楽であり、政府機関との交際手段としても重要であったことがわかる。

8　釣りと水泳

工場の埋立のために掘った池で、釣りや水泳をするのも一時期の娯楽であった。

最初埋立の為めに掘つた池ハ、相當廣くて深く、後には随分臭も入つた。多摩川から出る用水の水が田甫に入り、自然臭も入る様になる。工場員も休み時間は釣の競爭。鯉・鮒、其他種々の臭が居た。土工は休みの日にハ總掛りで排水ポンプを動力掛けてかい掘をして、大きな（一字空白）に三杯も湧つた事もあつた。大鯉・鯰・鰻など、相當大きいのが澤山入つた。遂に附近の人にも知れて、追々釣に来る太公望も増えて、取締りに困る様になつた。夏ハ水泳、倒底プールの比でない。長い所でハ百米ハ充分あつた。此の池ハ、後に多摩川河川改修の排土で埋まる迄、當分の間相當によい慰安の池であつた。

『陶苑懐古』で蒲田工場の建設を述べたところに、次のような記述がある。

何にしろ敷地は殆んど田甫で、然も附近から土を持つて來る所もない。此の邊では、埋立てにハ皆初めハ池を掘りて、其の採土で所要の部分から埋立てつゝ建築を進め、後に種々の廃物で之を埋めるのであつた。此處もその例に洩れず、最初窯場の横、第二細工場の西側に大きな池が掘られ、其の土で第一期工事の建物の地盤だけ埋立つた

右の引用中の池はこの池のことである。会社の中で釣りや水泳ができるのは、テニスと並んで良い娯楽であったのであろう。

9　強請・盗難・強盗

本節では、蒲田工場の生活の、また別の面について述べる。工場に侵入した強請・盗人・強盗がいたのである。

時にハ吾々の社宅にゆすりに来る者も屡々であつた。電車賃を貸して呉れとか何とか言ふて来る。何分田甫中の一軒家で、警察も遠く、近所ニ家ハない。従つて、斯様の時ハ直ぐ土工部屋に案内してやると、土工共は得意になつて之を散々の目に遭はした。こんな處にでも偶に盗難事件も起つた事がある。或る時土工部屋に盗賊が入りて、柱に掛けてあつた腹掛から、財布や時計をすつかりさらつて行つた。宵か夜中か、大の男が相當居たが、誰れも知らず、朝になつての大騒ぎである。何れ勝手元知つた者ニ違ひないが、遂ニ其後犯人上らず。之ハ大分後の事であるが、農園住宅に、加藤耕次の後ニ鈴木三五郎君が入つたのであるが、何時頃であつたか、鈴木君が入つて間もなくと思つてるが、之ハ宵の口であるが、強盗が入つた。

否、居直り強盗で、鈴木君ハ早速外に出て、金たらひ等を敲いて盗棒呼りをしたので、直ぐ逃げてハしまつたが、陶園の住宅に報告があつたから、直ぐ駐在所ニ走つた。

社宅に押しかけてきた強請は、工場建設に携わっていた土工達のいる土工部屋へ連れ込まれ、「散々の目に」遭わされたということである。土工達が体の良い用心棒のようなものである。しかし、この土工達も盗難事件に遭遇する。内部犯行も疑われたが、遂に犯人は捕まらなかった。また、農園住宅に居直り強盗が侵入したこともあった。蒲田工場は、治安の面で、やや問題があったようである。

おわりに

以上、本稿では主に『陶苑懐古』を素材に、大正時代における大倉陶園蒲田工場の生活に焦点を当てて述べてきた。蒲田工場の生活は、田園風景の中、文化的な社宅と寮に住みながら、職住接近で充実していたようである。当時の工場としては、住環境としてかなりモダンであったことがわかる。皆で一緒に一から新しい会社をつくりあげつつ、自分達の生活もつくりあげていったかのようである。そのような意味では、確かに職住接近の集団生活が大きな役割をもったのであろう。

しかし、その後時代が移り、次第に新しい従業員が増えていくとともに、このような創立メンバーの団結した生活も変化を余儀なくされていく。本稿では紙幅の関係で割愛せざるを得ないが、蒲田工場にも「個人主義の時代」が到来するのである。その後の蒲田工場の生活について論じることは今後の課題としたい。